

2017 JUA/EAU Resident Programme 参加報告

内 藤 晶 裕 (東京大)

今回私は、2017年3月24日～28日にイギリスのロンドンで開催された第32回 Annual EAU CongressのThe JUA/EAU Resident Programmeに参加させて頂きましたのでご報告いたします。

私にとってEAUは、2013年のミラノで開催された第28回 Annual Congressに初参加して以来で、今回は2回目となりました。出国12時間前にロンドン国会議事堂前でテロが発生し、不安な気持ちで現地に到着しましたが、ロンドン市内は「通常の生活を行うことがテロに屈しない意思表示である」との英国首相の声明通り、現場以外は通常と変わらない生活が行われていました。英国の意思の強さを感じずにはいられませんでした。

学会場であるExCeL Londonは市の中心部からは少し離れたシティー空港に近い場所で、2000年に完成し、ロンドンオリンピック時に柔道などの室内競技が行われた施設です。

EAUのプログラムは、Live surgery, ESU course, Hands on trainingなどの教育プログラムが充実しているので、本プログラムの参加対象を日本での専門医取得直後としていることが適切であると改めて感じました。

また、個人的に、海外学会の醍醐味はPlenaryにあると感じているのですが、今回も毎朝のPlenaryに参加しました。Plenaryの中では、腎癌における腎部分切除術と全摘除術の適応・リスクのディスカッションが非常に白熱していました。全摘除術派の発表者は、腎部分切除術のClavien-Dindo分類でGrade 3, 4の術後合併症のリスクは6%であるのに対して、全摘除術の同リスクは1%であることを強調していました。これに対し、部分切除術派の発表者は、術後に腎臓が1つ残ることの方が大事だと発言していました。最終的には、患者のベネフィットを考えて適応を決めることがとても大事であることが強調されており、改めて、この様な大きな学会においても、臨床において患者目線に立つ事の重要性を議論されている事に感銘を受けました。

Plenary以外にも、精巣癌リンパ節転移の拡大リンパ節郭清術を扱ったビデオセッションなどもあり、難症例に対する具体的な手術法などを拝聴することが出来、大変勉強になりました。また、JUA/EAU Joint Sessionでは、日本を代表する先生方が国内とヨーロッパでの臨床の現状について熱く議論されているのが印象に残りました。

最後に本プログラムの特徴についてご報告します。本プログラム参加者は、レセプションや、Residentディナーの参加が可能でした。特にResidentディナーは、同世代の欧州の泌尿器科医と直接話す貴重な機会、給料や夏休みなど普段知り得ないような話をすることができ



知人の Dr. Patrick Coloby (SIU President) と学会場内にて。



日本からの Resident メンバーと学会場の入口にて。

ました。(ディナーというよりは、クラブイベントのような場所でしたが…)

改めて、本プログラムに参加させて頂く機会を与えてくださったJUA, EAU関係者の方々、ならびに若手医師を刺激するような本プログラムの魅力を学会誌にご報告して下さった多くの先輩方に感謝申し上げます。また、学会開始前にロンドン市内を御一緒させて頂いた東京医科歯科大学の先生方、最終日に御一緒させて頂いた千葉県がんセンターの先生方にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

貴重な経験を体験することが出来る本プログラムが今後も継続されていくことを祈念して報告を終えさせていただきます。